HOKKAIDO UNIVERSITY

2017年2月5日

科研・基盤A

# 「不確実性と多元的価値の中での順応的な環境ガバナンスのあり方についての社会学的研究」

# 第4回研究会

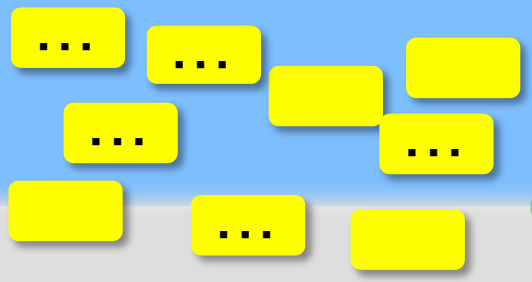
北海道大学

宮内泰介

# 本日（2017.2.5）の目標

目標1
この科研で各自が追求する事例やテーマを共有する。

目標2
この科研で今後鍵になりそうなキーワードを抽出し、そこから、この科研の今後を展望する



昨年7月の第1回研究会で:

# 本科研で考えたいこと

（1）引きつづき、順応的ガバナンスの要件＝順応性を保ちながらプロセスを動かしつづけられる要件、の探求

（2）それ以外の探求

（2-1）順応性以外の軸の探求

（2-2）社会学（社会科学）2.0へ

（2-3）他に探求すべきテーマ。また、新しいフレームワークの提示

# 昨年7月の第1回研究会で:
# 研究調書上の計画

28事例の詳細なフィールドワーク

順応的ガバナンスの8つのテーマについて知見抽出

- (a)地域環境史・地域固有の文脈の発掘・記述
- (b)自然と社会のレジリエンスの解明
- (c)グローバルな価値とローカルな価値の齟齬や相互浸透の実態と課題分析
- (d)レジティマシー(正当性)のダイナミズムの実態分析
- (e)協働と合意形成の実態分析
- (f)プロセス・マネジメントと中間支援のあり方の分析
- (g)研究者・外部者の役割についての分析
- (i)アクションリサーチと社会調査のあり方の分析

順応的ガバナンスのモデル構築

- (i)地域固有の歴史を踏まえた合意形成の多元的な方策の検討と構築
- (ii)プロセス・デザイン、プロセス・マネジメントと中間支援・専門家支援の方法についての検討と構築
- (iii)多様な主体が使える社会評価ツールと社会調査法の開発

昨年7月の第1回研究会で:

# アウトプットのイメージ

(i)地域の歴史を踏まえた合意形成
(ii)プロセス・デザインと中間支援の方法
(iii)社会評価ツールと社会調査法

についての具体策やガイドライン作成

ツール提供
・社会評価ツール
・アクションリサーチツール

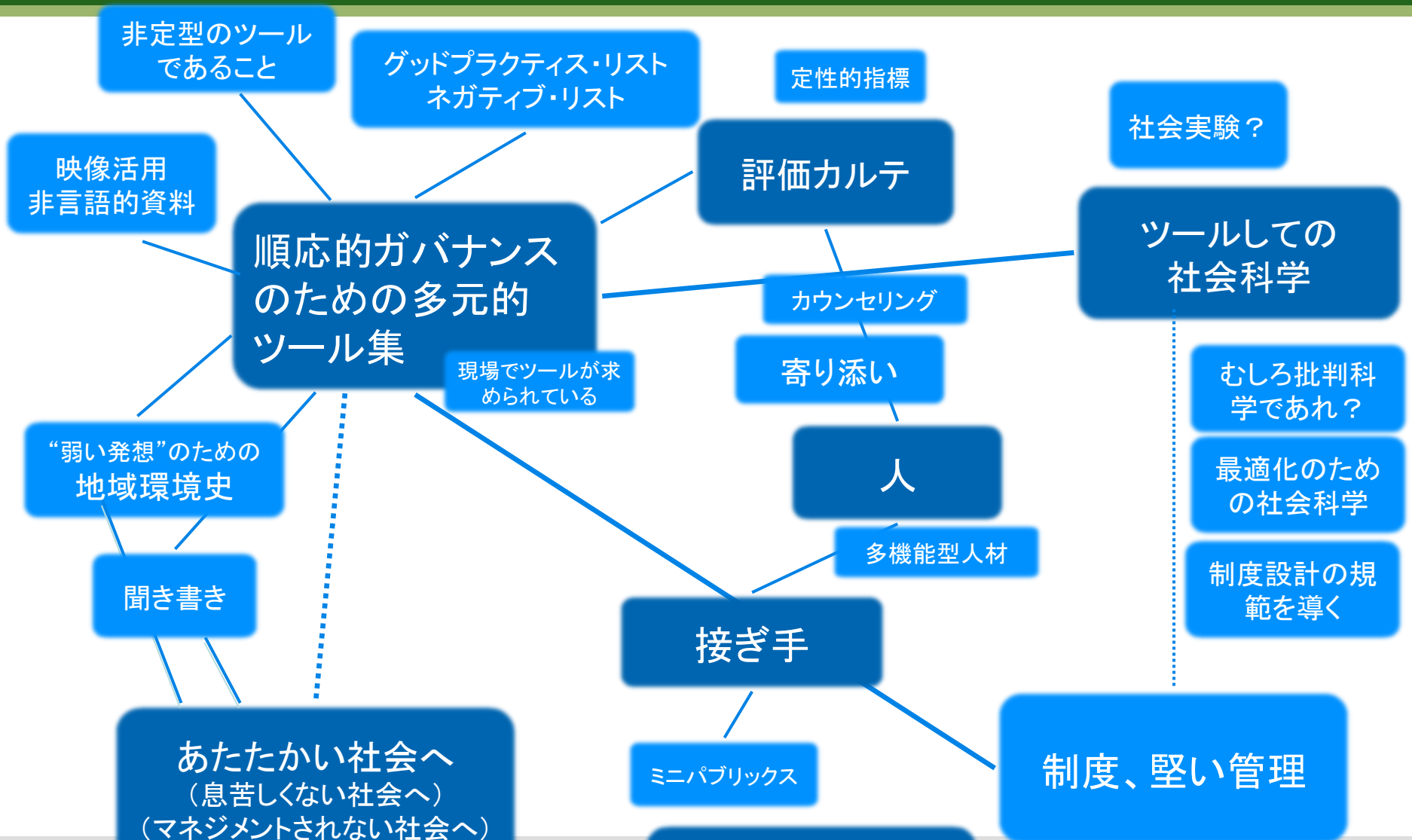
多角的なアウトプットと
政策提言

理論的な書物
（基本コンセプト・学問的検討）
（日本語と英語？）

有効な事例集作り

地域環境史叙述
聞き書き作成

# 探求すべき事柄
# ～2016.7.23第1回研究会の議論より



# 探求すべき事柄
# ～2016.7.23第1回研究会の議論より

この科研では、さまざまな事例の実践的調査と理論的な探求から、順応的ガバナンスのための多元的なツール集を考え、アウトプットすることを目標としたい。

ツールは非定型で多元的なものであるべきだが、たとえば、グッドプラクティス・リスト、ネガティブ・リスト、聞き書き、地域環境史、映像作成、そして評価カルテなどが考えられる。中でも評価カルテ（定性的指標を使ったカルテ）は、寄り添い型支援やカウンセリングのツールとしても自己評価ツールとしても使える。堅い科学的管理と柔軟で順応的なプロセス管理の間には、ミニパブリクスなどいくつかの接ぎ手が考えられるが、中でも多機能をもった「人」の存在は接ぎ手として大きい。その「人」がカルテなどのツールを使ったカウンセリングや寄り添い型の支援を行うことができる。

順応的なガバナンスのためのツールが、定型的になって息苦しい社会を生み出してはいけない。どうすればそうしたツールを使いつつあたたかい社会を作っていけるかを同時に考えなければならない。

社会科学そのものも順応的なガバナンスのためのツールとなりうる。そこでは、批判的科学としての側面、規範を生み出す科学としての側面、最適化のための科学といった多元的な役割を考えるべきであろう。

# どうすれば環境保全はうまくいくのか

## 現場から考える「順応的ガバナンス」の進め方

宮内泰介 編

# 「ずらし」と「順応」のプロセスデザイン

環境保全の現場には、
さまざまなズレが存在している。
科学と社会の不確実性のなかでは、
人びとの順応性が効果的に発揮できる
柔軟なプロセスづくりが求められる。

前作『なぜ環境保全はうまくいかないのか』に続き、
順応的な環境ガバナンスの進め方を考える。

新泉社

序章
どうすれば環境保全はうまくいくのか
順応的なプロセスを動かし続ける
1 なぜ環境保全はうまくいかないのか 014
2 不確実性と順応性 016
3 順応的なプロセスと間違わないハンドリング 021
4 順応的な支援と社会の順応性 026
■宮内泰介 014

I
合意形成の技法
―社会的受容のプロセスデザインをどう描くか

第1章
家庭ごみ減量化政策にみる市民参加と手続き的公正
札幌市における計画づくりから実践のプロセスデザイン
1 市民参加による計画づくり 030
2 市民参加による計画策定と実践 033
3 プロセスデザイン(1) 計画策定段階――市民共通の目標を共有化する 039
4 プロセスデザイン(2) 計画決定後・導入前――繰り返しの対話の重要性 048
5 プロセスデザイン(3) 新ルール導入後――参加から協働の取り組みへ 052
6 おわりに――プロセスデザインの重要性 055
■大沼 進 030

第2章
再生可能エネルギーの導入に伴う「被害」と「利益」の社会的制御
東京都八丈島の地熱発電事業計画における取り組みを中心に
1 再生可能エネルギーのもたらす社会的課題 059
2 再生可能エネルギー事業の環境影響と規制 062
3 八丈島の地熱利用事業計画 069
4 地熱の利用拡大に伴う課題の社会的制御 074
5 おわりに 082
■丸山康司 059

II
余地の創造
―価値のずらしから描く協働と共生

第3章
農業土木でなぜ環境保全はうまくいかないのか
農業水路整備と絶滅危惧種カワバタモロコ保全の間にみる「工夫の余地」の創造
1 農業土木事業でなぜ環境保全は揉めるのか 086
2 小さな魚「カワバタモロコ」をめぐって 088
■田代優秋 086

3 農業土木事業とは？ 089
4 対象地域の水路環境——地元農家不在の「保全」 091
5 水路改修工事の着工——合理的な「技術的解決策」？ 097
6 アカミミガメの食害騒動 101
7 多元的な価値を取り戻す場としての「工夫の余地」 104
8 「工夫の余地」を設計する——地域資源の利用と管理の一体的デザイン 108
9 おわりに——どうすれば環境保全はうまくいくのか 111

第4章
野生動物と押し合いへし合いしながら暮らしていくために
青岩手県盛岡市におけるツキノワグマ被害対策にみる多様な主体間の協働の構築
■山本信次・細田（長坂）真理子・伊藤春奈 113
1 「動的平衡」としての野生動物との共存——ガバナンスをいかに構築するか 113
2 ツキノワグマ保護管理計画の策定と放獣調査 116
3 クマ被害対策をめぐるステークホルダー間の相互不信 118
4 相互不信がもたらす悪影響——不信感を拡大する「想いのすれ違い」 122
5 関係者間の協働関係の構築と成果——クマの大量出没が契機に 125
6 信頼関係構築の取り組みとその効果——相互不信の払拭へ 128
7 順応的ガバナンスの構築と継続——目標の共有・信頼関係の構築・住民の自己効力感の回復 133

第5章
「山や森を走ること」からの地域再生・環境ガバナンス構築の試み
マウンテンバイカー、トレイルランナーによる「ずらし」と「順応」
■平野悠一郎 136
1 はじめに——「山や森を走る」バイカー、ランナーの増加と軋轢の発生 136
2 バイカー、ランナーたちの「気づき」と「学び」 140
3 地域活性化への「ずらし」と地域での「順応」 147
4 おわりに——農山村の環境保全・地域再生への新たな展望 155

III
「よそ者」と支援
——順応的な寄りそい型の中間支援

第6章
「獣がい」を共生と農村再生へ昇華させるプロセスづくり
「獣害対策」から「獣がい」へずらしてつくる地域の未来と中間支援の必要性
■鈴木克哉 160
1 「獣害」が農村の豊かさを消失させる 160
2 「獣害」対策からの脱却 164
3 「獣害」からのずらしの実践 169

4 「獣害」対策から「地域再生」への道筋は可能か？ 176
5 中間支援の枠組みづくり――ソーシャル・ビジネスのモデルづくり 181
6 おわりに――「獣がい」を資源化し農村の豊かさを守る 186

第7章 協働の支援における「寄りそい」と「目標志向」
北海道大沼の環境保全とラムサール条約登録をめぐって
■三上直之 189
1 はじめに――最難地・大沼の水質汚濁問題 189
2 地域外からの支援者とその役割――協働を支援する「補助人」 193
3 話を聞くことを通じた課題の把握――ステークホルダー間の対話の場づくり 196
4 ラムサール条約登録への急展開 200
5 協働の隘路と、再び聞くことによる支援へ 206
6 「協働の支援」の二つのかたち――「寄りそい」型と「目標志向」型 211

第8章 「よそ者」のライフステージに寄りそう地域環境ガバナンスに向けて
長崎県対馬のツシマヤマネコと共生する地域づくりの事例から
■松村正治 218
1 はじめに――ヤマネコ保護に力を尽くす「よそ者」 218
2 対馬の地域社会とツシマヤマネコ保護 219
3 ツシマヤマネコと共生する地域社会づくり 226
4 環境ガバナンスに果たす「よそ者」の役割 232
5 不安定な「よそ者」の地域への向き合い方 234
6 「よそ者」のライフステージと地域との関係 238
7 地域社会の「よそ者」の受け入れ方 241

IV 学びと評価
――プロセスの気づきと多元的な価値の掘り起こし

第9章 自然再生の活動プロセスを社会的に評価する
社会的評価ツールの試み
■菊地直樹・敷田麻実・豊田光世・清水万由子 248
1 コウノトリの野生復帰から考えたこと 248
2 自然再生の順応的プロセス 251
3 自然再生の社会的評価ツールの開発 255
4 中海の干拓事業中止と自然再生 260
5 中海の自然再生を社会的に評価する 265

6 社会的評価ツールの使い方 272
7 おわりに——自然再生を使いこなすツールづくりに向けて 274

第10章
## どうすれば自然に対する多様な価値を環境保全に活かせるのか
宮崎県綾町の「人と自然のふれあい調査」にみる地域固有の価値の掘り起こしが環境保全に果たす役割
■富田涼都 278
1 はじめに——自然に対する多様な価値づけは環境保全の厄介者なのか 278
2 「人と自然のふれあい調査」とは 280
3 綾町と照葉樹林の保全 281
4 上畑地区における「ふれあい調査」の実施 283
5 上畑地区の「ふれあい調査」後の展開と波及 287
6 環境保全に「ふれあい調査」が果たした役割 293
7 自然に対する多様な価値を活かすために 299

第11章
## 空間の記憶から環境と社会の潜在力を育むために
岩手県宮古湾のハマと海の豊かな記憶から
■福永真弓 303
1 はじめに——社会的営みとしての「想像」 303
2 気づきと記憶——潜んでいる可能性を見いだすために 306
3 環境の潜在力を語る記憶と物語 314
4 絵地図という手法——複数の世代の記憶から紡ぐ環境とのかかわりの履歴 318
5 想像の力とともに環境と社会の潜在力を育む 325

終章
## 順応性を発揮するプロセスデザインはいかに可能か
持続可能な環境ガバナンスの進め方
■宮内泰介 332
1 順応的ガバナンスにおける三つの要件 332
2 五つのポイント 333
3 仕掛け 336
4 プロセスデザイン 337
5 順応性と想像力 338

編者あとがき 341
文献一覧 v
編者・執筆者紹介 i

ブックデザイン——鎌田美咲
カバー写真(表)——○○○○・○○○○・○○○○
カバー写真(裏)——○○○○・○○○○・○○○○
本扉写真——○○○○
三三一頁写真——○○○○
＊特記のない写真は、各章の執筆者撮影

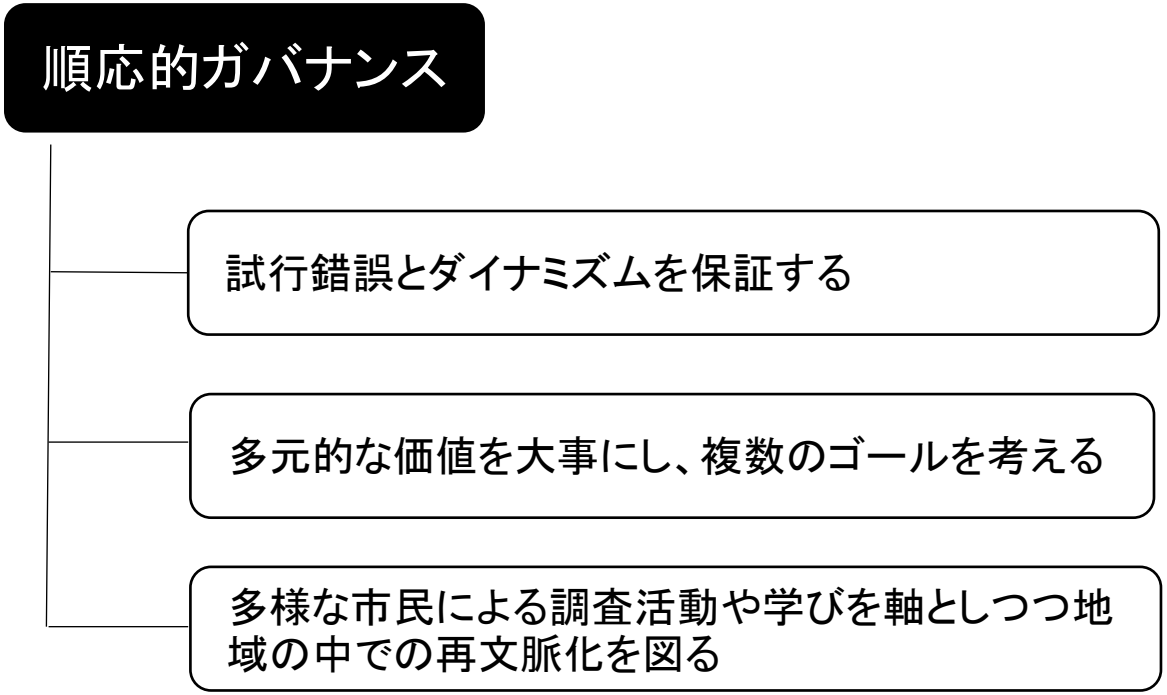



図　順応的ガバナンスの3つのポイント

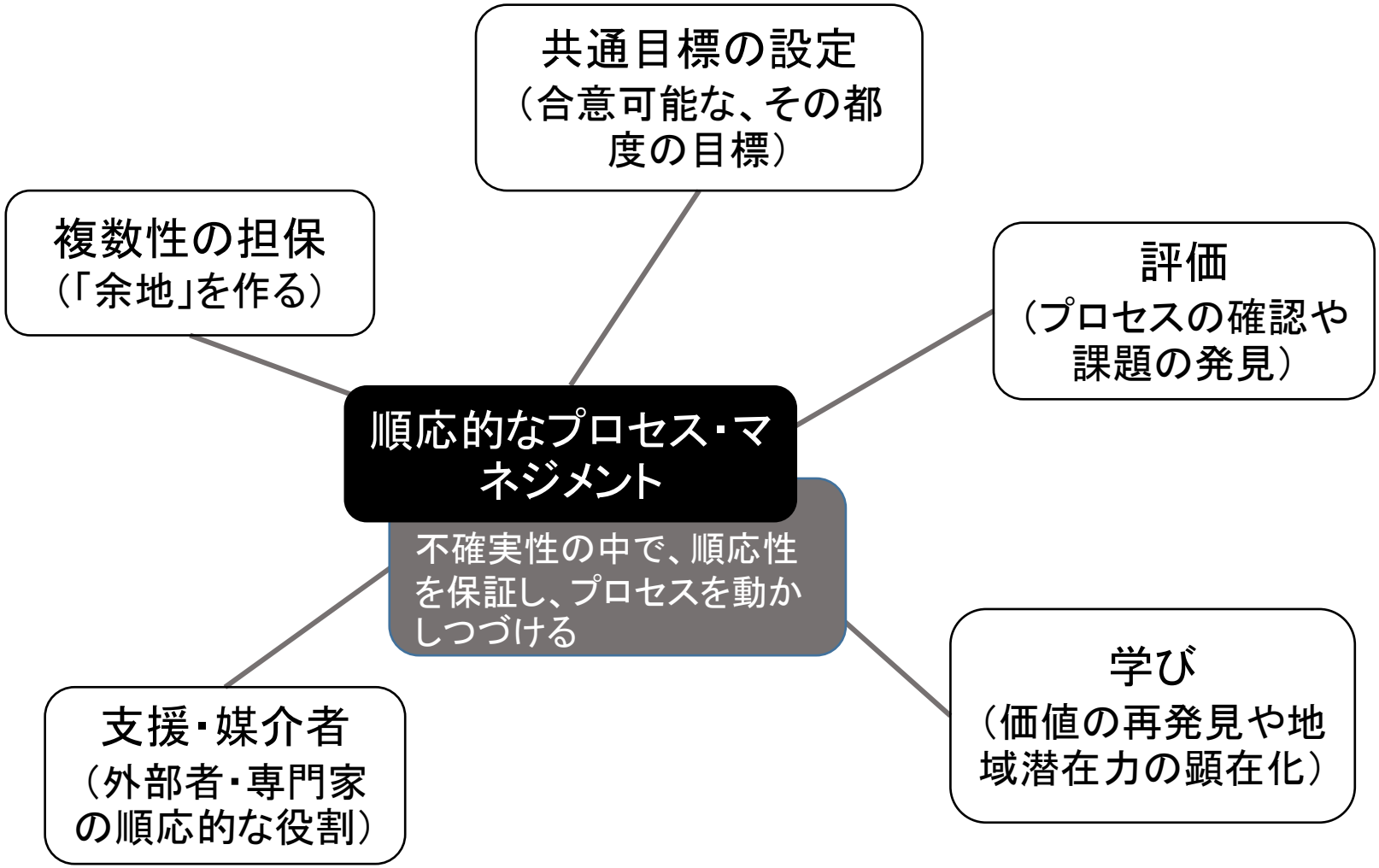
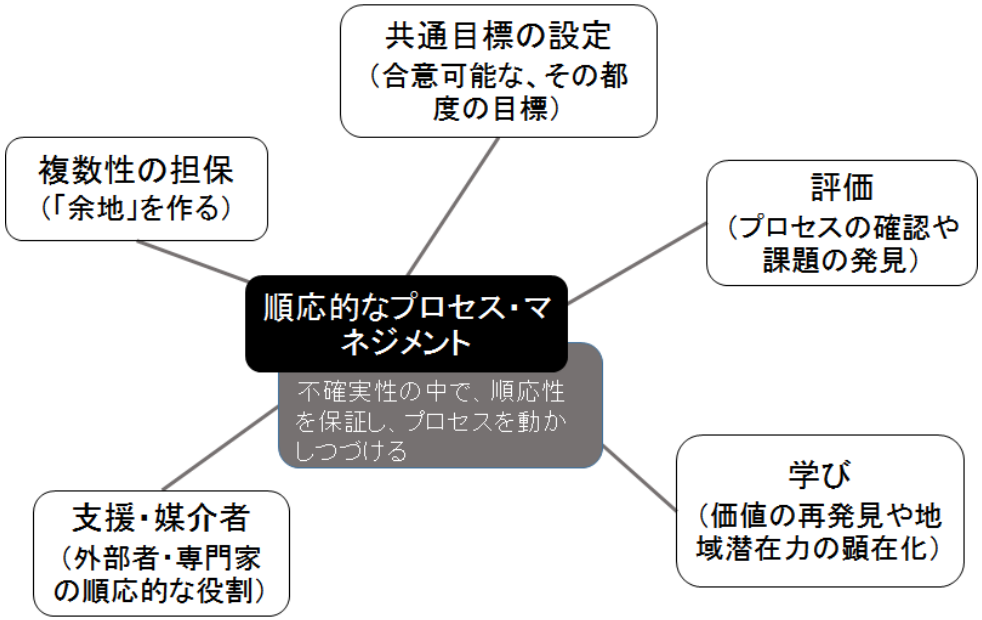



図　順応的なプロセス・マネジメントの諸要件




多中心的なプロセスデザイン

さまざまなそのときそのときのしかけ

プロセスを駆動する

人と社会の順応性

# 宮内はどういう事例で研究するのか

- <u>イワシ研究</u>
  - イワシ漁業と地域社会のレジリエンス・モデル？
    - 千葉、瀬戸内海、長崎
    - 膨大なデータの蓄積＋現状の調査→モデル化
- <u>アザラシ獣害と漁業</u>
  - 北海道アザラシ管理検討会
  - 礼文島・稚内・天売島等における漁業の歴史と海獣被害への適応
- <u>石巻市北上町のコミュニティ再編と自然資源管理</u>
- <u>札幌市のヒグマ</u>
  - 酪農学園大学・佐藤喜和さん＋札幌市担当部署
  - 札幌市のいくつかの場所での「合意形成」
- <u>聞き書き実践</u>